なぜ「私たちは真理を前提せざるをえない」のか？

氏名　瀧 将之（上智大学非常勤講師）

『存在と時間』第四十四節は、同書の中でもいささか風変わりな節である。a,b,c という三つのセクションへとさらに細かく分けられたこの箇所で、最後に位置する(c)は「真理のありようと真理前提」と題されており、そこでは次のことが論じられるのであるとハイデガーは導入的に概要を示したところで述べていた。「考察は、真理の「本質」を問う問いには、そこに必ず真理のありようを問う問いがともに含まれていることを明らかにする。そうしながら、「真理がある」というとき、それが存在論的に何を意味しているのか、真理が「ある」のを「私たちが前提とせざるをえない」というときの、その「せざるをえない」に含まれる必然性」の様態とはどんなものであるのかが解明されることになる」(SZ 214)、と。

このように「真理を前提せざるをえない」という事態が成立しているとして、その根拠をハイデガーは、「前提する」というはたらきそれ自身を「現存在はみずからに先んじてある」という気遣いの構成契機のひとつに基づけつつ、現存在の「被投性」に求めていることは明らかである。「私たちは真理を前方に差し出す、前提とする、そうせざるをえない。真理は現存在の開示性として存在せざるをえない。その点では、現存在自身がそれぞれ自分のものとして、この現存在の存在せざるをえないのと同じである。これは、現存在が本質的に世界のうちに投げ込まれている被投性を構成する契機である」(SZ 228)と明確に述べられていた。

だが、こうした説明をいくら読み解いてみても、そこで述べられている「私たち」というものがどのようなものであり、またそれがどのようにして成立するのかということについては、特段ハイデガーからそれ以上の詳しい説明を聞くことはできないように思われる。被投性が、最終的には現存在のもっとも極端な可能性である死の可能性に関わる概念であり、さらに現存在にとっての死とは、ひとりひとりがみずからのもっとも固有な可能性として引き受けられるべきものであることを考え合わせるとき、「私たちは真理を前提せざるをえない」というパッセージは、にわかに謎めいた様相を帯びてくるように見える。

本発表では、『存在と時間』で展開された真理および真理概念についての議論を丁寧に追いながら、「私たちは真理を前提せざるをえない」という事態の内実について明らかにすることを目指す。

SZ: Sein und Zeit, 17.Aufl., Max Niemeyer, 1993